



TITLE:

静脩 Vol. 4 No. 1 (1967.5) [全文]

AUTHOR(S):

---

CITATION:

静脩 Vol. 4 No. 1 (1967.5) [全文]. 静脩 1967, 4(1)

ISSUE DATE:

1967-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65918>

RIGHT:



静脩

1967年 5月

Vol. 4, No. 1

The Kyoto University Library Bulletin

## 「書なきにしかず」

羽 田 明

読書について、孟子は「ことごとく書を信ずれば、書なきにしかず」という名言を残している。もっとも、注釈家によれば、書は儒教の経典である五経のひとつで、周代の史書として、もっとも重要な書経を指したものらしい。ただ、学者のうちには、一般の書物の意味に理解した人もないではない。それに、このような解釈が間違いとしても、書経に対してさえ批判的であった孟子の、書物一般についての考え方は、自明といってよい。

師弟相伝を旨とした旧中国の学問でも、長い歳月の間には、新説が旧説にとって代り、新しい学風が古い学風を一新した。文学や芸術の分野でも、事情はそれほど違わなかった。批判精神こそは、文化の発達の原動力だったのである。「ことごとく書を信ずれば」という孟子のことばが、現代においても少しもその意義を失っていない理由はそこにある。いな、現代においてこそ、その重要性はいっそう大きいと思われる。

柄にもなく、孟子に托して、このような読書論を試みた直接の動機は次のようである。近ごろ、教養部の学生諸君のために購入すべき新刊書の選択に立会ったとき、あらためて、わが国の出版文化の隆盛に目を見張る一方、おびただしい書物のはんらんにいささか戸惑いを感じたことがそれである。もっとも、新刊書といってはほとんどなく、いわば活字に餓えていた戦中から戦後の一時期にかけてのことを思えば、現在の状態もむしろよろこぶべきかも知れない。

ただ、「過ぎたるはおよばざるが如し」のたとえ通りで、この恐るべき書物のはんらん状態では、あれこれと読みかじるのが精一杯で、大方の諸君にはじっくり書物を熟読などできないのではないかと心配にもなる。それどころか、意気沮喪して、もっぱら娯楽的な読書に逃避する人々も出てくるのではないか。こうなれば、孟子とは別の意味で、「書なきにしかず」といわざるをえまい。この危険を避ける工夫は、人によっていろいろ考えられよう。流行につられないで、内外の古典ないし古典的な書物を読むこともそのひとつであろう。自然科学はともかくも、人文科学や社会科学、とくに人文科学に志す人々にとっては、それがもっとも大切なことだと信じる。

(教養部教授)

告 知 板	その1
-------	-----

## 1. 文献複写料金の改訂について

この4月より、附属図書館の複写料金が次のように改訂されたのでお知らせする。この改訂は文部省の方針にもとづき、国立大学における文献複写料金が全国的に統一されたことによるもので、本学内の東洋学文献センター、医学図書館の料金にも、下の表が適用される。

区 分	料 金	備 考
マイクロフィルム方式による文献複写		
ネガフィルム (35m/m)		
基本料 1 件につき	50円	
ネガフィルム撮影料 1 コマにつき学外者の場合	10円	
学内者の場合	8 円	
特殊撮影料 1 コマにつき	2 円	和漢書で特別な技術を要するものについて、ネガフィルム撮影料に加算する額をいう。
ポジフィルム (35m/m)		
ポジフィルム焼付料 1メートルまで	100円	1メートル未満の端数があるときは1メートルとして計算する。
1メートルをこえる部分について1メートルにつき	60円	
複写用印画紙による引伸		
引伸料 キャビネ版 1 枚につき	12円	
A 5 版 1 枚につき		
学外者の場合	25円	
学内者の場合	20円	
B 5 版 1 枚につき		
学外者の場合	40円	
学内者の場合	30円	
A 4 版 1 枚につき		
学外者の場合	50円	
学内者の場合	40円	
電子複写方式による文献複写		
複写料 B 4 版 1 枚につき		
学外者の場合	35円	B 4 版以下の用紙を使用した場合も B 4 版の料金とする。
学内者の場合	30円	

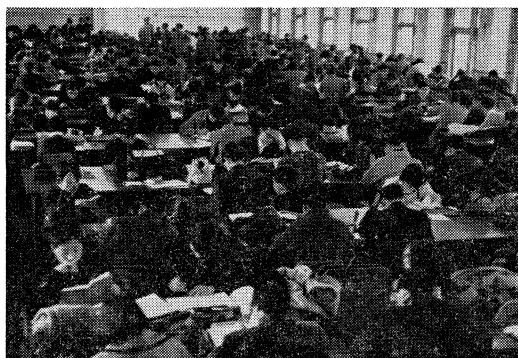
## 告 知 板

### その2 経済学

#### 部図書の利用方法変更について

—経済学部学生の皆さんへ—

すでに図書館や学生控室での掲示で、ご承知のことと思いますが、経済学部の学生諸君が学部所蔵の図書を利用する方法が、この4月から変わりました。附属図書館を通じて借り出す従来の方法を改め、学部閲覧室（法経新館2階西側）において直接取り扱うことになりました。



人・人・人……学年末試験のころ

ただし、人手不足のため、当分の間午前10時から12時までに限ります。なお、戦前購入の外国書については、従来通り図書館閲覧掛を通じて申込んでください。また、ゼミナールで使用する図書については、指導教官の承認をえれば、別に10冊まで借り出すことができます。図書検索を早く確実に行うには、目録カードの種類とか、排列上の約束とか、分類表の体系とかをよく理解することが必要になります。このためのすりものや、実例による案内などを用意してありますが、より詳しくは掛員に遠慮なく尋ねてください。文献の検索は、図書カードによるのが基本ですが、このほかに、各種の出版目録や、特定のテーマについてどのような文献があるかをしめす書誌や抄録誌などを自由に使いこなすことが必要です。閲覧室にはこのような書誌類のほか、事典、年鑑、ハンド・ブックなどの基本的な参考図書を備えていますから、大いに活用してください。

（経済学部図書室）

## ニ ュ ー ス ————— ト ピ ッ ク ス

### 1. 本学和文雑誌総合目録刊行される

本学所蔵雑誌の総合目録の一環として、1965年2月刊の自然科学欧文篇、1966年12月刊の人文科学欧文篇に続いて、このほど和文篇が刊行された。これは和文および中国文・朝鮮文雑誌 9,231タイトル（自然3,692、人文4,809、中国文・朝鮮文730）を1冊（424p.）にまとめて収録したもので、学術雑誌に限らず、一般雑誌・新聞をも含んでいる。今回の刊行によって、既刊の欧文篇とあわせて、本学所蔵雑誌の全容を明らかにした総合目録が一応完成した。これらの目録の作成にあたって部局図書室、教室から寄せられた協力に、改めて厚くお礼申し上げるとともに、多くのかたがたに広く利用されるよう期待している。

### 2. 本学の蔵書150万部250万冊を突破！

京大附属図書館では部数を単位に登録番号が与えられているが、この3月30日、150万部目が登録された。未整理だった吉田経房（藤原氏・1143—1200）の承安2年（1172）より文治4年（1188）までの日記「吉記」という故実および平安末、鎌倉初期の政局の動きを知る上に貴重な史料1部29冊（この写本28冊は江戸末期の書写で、抜書1冊は室町中期のものと推定される。）がこの日貴重本として登録され150万部目になったのである。（次頁へ）

本館の蔵書は昭和8年で100万冊、昭和34年に200万冊に達し、本年3月には250万冊をこえた。洋書120万、和書130万の割合である。日本の蔵書番付では昭和41年で300万冊をこえた東大には及ばないが、西の横綱格というところである。

### 3. 開室が待たれるウイルス研究所図書室

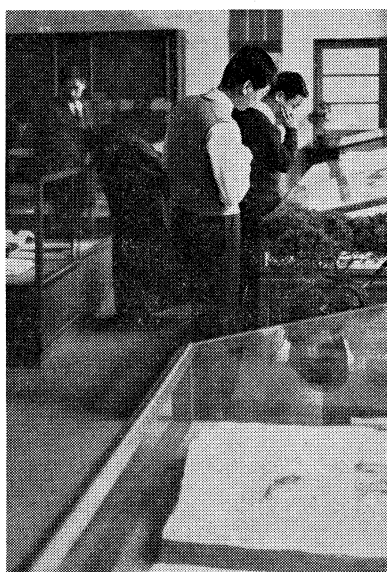
一昨年に着工されたウイルス研究所の新館は、附属病院の西部構内に建てられ本年3月31日竣工を見た。かつて、散在していた各研究部門が総合されることによって、その研究成果は、大いに期待されるものがあるといえる。

ウイルス研究所図書室は、1・2階の南側に設けられ、面積延48m<sup>2</sup>の閲覧室と事務室、3層の積層式書架を配する延72m<sup>2</sup>の書庫によって構成され、かつて分散していた図書を集中することによって、より合理的な利用が考えられていると聞く。近く開室されるために、目下、鋭意準備が行なわれつつあり、開室後は医学図書館および結核研究所図書室とともに、スクラムを組むなかでよりよき図書館作りへ一歩一歩前進されるよう希望したいものである。

## 展 観

### ○ 京都大学貴重書展

本館では毎年、新入学生を歓迎する意味を含めて、4月に展観を催してきているが、今年も、4月11日より13日までの3日間、「京都大学貴重書展」と銘うった展観を開いた。この展観には、全学・各部局の協力を得て48点が出品され、連日多数の観覧者があった。展観品のおもなものは、奈良絵本6点、御陽成天皇宸翰、近衛信尹書状、鎌倉幕府免許旗章（御用船船章）、1578年刊のステパヌス版プラトン全集、ホップス著「リヴァイアサン」の初版本、デカルト著「省察」の初期刊本（1644）で西田幾太郎博士のサイン入りのもの、カール・マルクス及びエンゲルスの自筆書翰、フレール著「母の歌と愛撫の歌」（1844年刊）、中国殷代の甲骨（牛骨と亀甲）、杉田玄白著「解体新書」（安永3年刊）、各種十手、ナウマン象の臼歯、平範記（仁平3年写、重要文化財）その他である。



写真：京都大学貴重書展

### ○ アメリカ・ペーパー・バック図書展

アメリカ文化センターの後援で4月18日より20日までの3日間、本館陳列室において開催された。自然、人文、社会各分野にわたるペーパー・バック1,200冊を展示した。

### ○ 英米大学出版局図書展

アメリカ文化センター、英国文化センターの後援により4月24日より26日までの3日間、図書館において「英米大学出版局図書展」が開催された。約5千冊の図書が展示され、盛況裡に終了した。

## 資料紹介

### ○ マイクロ・フィルム版「毎日新聞」

このほど、図書館に毎日新聞のマイクロ・フィルム版が購入備え付けられた。同紙が明治5年2月21日、東京日々新聞として創刊して以来、昭和18年大阪毎日新聞との統合を経て、昭和41年末にいたる32,000余日の全紙面をマイクロ・フィルム（ポジ）化したもので、リール数にして734巻の多きに達する。本館は、これにより、明治・大正・昭和3代にかけての、政治・経済・文化・風俗等、社会全般に関する貴重な資料をコレクションの中に加えたことになる。

なお、これの利用と保管の具体的方法については目下検討中で、決定次第お知らせする筈である。

### ○ インド政府から図書寄贈さる

3月28日、総長室においてバドル・ウド・ディン・タイアブジインド大使夫妻及び秘書官等出席のもとに、奥田総長に図書67冊が贈呈された。インド政府からはこれまでも百数十冊の図書が寄贈されているが、今回贈られた図書の中にはネール著、「インドの発見」、それにタゴール、ガンジー等の著書も含まれ一般書から学術、研究書にわたっている。

### ○ 教 官 文 庫

本館には、昭和16年以来、全学の教官から、その著作物（編書、訳書、監修書を含む）の寄贈をうけて「教官文庫」が設置されている。本文庫のうち新着書を開架室に排架して広く利用に供してきたが、現在では本文庫の全冊数も600冊以上に達しており、今後とも、教官各位の御協力を得て、この文庫が一層充実され、もって本学教官の業績を網羅した一大金字塔たらしめることが期待されている。

今後、教官文庫の新着書を順次掲載する予定であるが、ここには、今年4月以来寄贈をうけた著書を御紹介しよう。

- 「工業分析化学概説3」 舟阪 渡著（工学部教授）広川書店 昭42刊 602p.
- 「天人の譜」 長広敏雄著（人文科学研究所教授）淡交社 昭42刊 188p.
- 「海事経済史研究」 堀江保蔵編（名誉教授）海文堂出版 昭42刊 261p.
- 「生活環境の衛生学」 庄司 光著（工学部教授）柴田書店 昭42刊 274p.
- Honjyo, Eijiro(名誉教授): The Social and economic history of Japan. N. Y., Russell and Russell Inc. 1965, 410P.
- Honjyo, Eijiro : Economic theory and history of Japan in the Tokugawa period. N. Y., Russell and Russell Inc. 1965, 350P.



原子炉実験所図書室

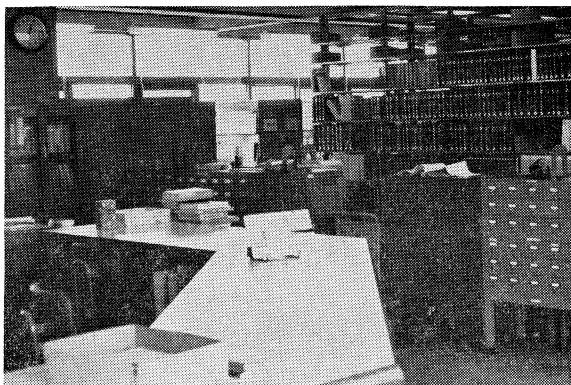
原子炉実験所は昭和38年4月1日、大阪府泉南郡熊取町に国立大学附置共同利用研

究施設の一つとして設置された。昭和31年11月原子力委員会において、大学における基礎研究および教育のための原子炉を関西方面に設置することが決定されたが、その設置場所の選定について幾多の迂余曲折があつて数年を費したのである。本研究所図書室は研究棟の3階にあり、南には葛城連峰、北には大阪湾を望み、遠く六甲の夜景

も楽しめて読書や実験、研究の疲れを癒してくれる。しかし、図書室としてはこのように実験所の最高階に位置を占めることはあまり喜ぶべきことではない。エレベータやリフトのないこの建物で、たとえば製本などのときのことを想像していただきたい。

蔵書数は約7,000冊、そのうち3割5分程度は個々の教官研究費によって購入されたもので図書室には置かれていない。図書室にある約4,500冊のうち、大略250種の製本された雑誌が書架全体の6割近くを占めている。他にこの実験所の性格を端的に示すものとして、AEC(アメリカ原子力委員会)レポートのマイクロ・フィッシュがある。現在のところ1959年1月～1965年4月までの分、約80,000枚を所蔵している。しかしこれらの資料も所外の人に対しては閲覧以外の利用に応じられないのが残念である。

41年度の数字を見ると、増加冊数1,974冊。内訳は教官研究費によるもの937冊。図書室1,037冊(そのうち製本雑誌が525冊)、貸出冊数は1日平均1.25冊である。これらの数字と、図書館の基本的なあり方を考えあわせてみれば、この図書室の問題点がどこにあるかも明白である。先日所内で行なった「図書室利用調査について」のアンケートの集計もそのことを裏付けてい



るように思われる。

図書室の職員は現在3人(3月末までは4人)で全員司書の有資格者だが、用度掛に属し、官職も定員とか欠員不補充とかに縛られて行一、行二、定員外とバラエティに富んでいる(?)。

改善を要する点は多々あるが、二・三をあげると、重複図書をなるべく少なくして予算を有効に使うこと。目録作成の附属図書館依存をやめて、実験所の利用者の使用し易い目録を作ること。書誌分類目録を作ること。職員の官職の一元化と図書掛の新設等である。

最後をお願いしたいことは、創立後、日も浅く資料に乏しい上に僻地にあるため、研究に何かと不便が多く、よく京都の各部局へ資料の閲覧、複写依頼等でお世話になっており、今後ともよろしくお願いしたいということである。

## あ と が き

はや桜の花もちって、新緑の風かおる季節をむかえてしまいましたが、おくれませながら、この春あたらしく京都大学の門をくぐられた1回生みなさんに「おめでとう」を申しあげます。どうか講義のあいまには、気軽に附属図書館や、教養部図書室などの本学の図書を有効に御利用下さい。

この「静脩」は、全学の図書館・図書室と利用者との対話、コミュニケーションをはかることを目的として発刊されているものですから、図書館や、読書に関する御意見があれば、最寄りの図書室職員に御投稿下さい。

なお、4月から本紙の編集は下記の18名が担当することになりました。

広庭 基介(本館)	吉井 良之(本館)	上田 展世(本館)	木村 祥子(本館)
小山 隆義(本館)	中村 久蔵(教育)	古原 雅夫(医)	若城 千代(薬)
門田 泰典(数研)	小国 健一(文)	藤本 俊(法)	沢居 紀充(経)
加藤 道子(理)	井本 夙江(工)	武内 隆恭(農)	乾 美穂子(教養)
植田 博美(人文)			

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 4, No. 1(通巻16号)1967年5月15日発行・編集発行人：  
岩猿敏生 発行所：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電代表77-8111(内線)2220-2238